Osaka University Knowledge Archive

Title	〈帝国〉とマルチチュードの政治学
Author(s)	前田, 雅司
Citation	年報人間科学. 2007, 28, p. 19-37
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9017
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

〈帝国〉とマルチチュードの政治学

前田　雅司

〈要旨〉

資本のグローバル化において、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、近代の国民国家を超克する形で展開される主権的権力のあり様を〈帝国〉と見なした。そこで捉えられる〈帝国〉は、内部と外部という境界を突き崩す形で生成する内在的な資本の運動であり、また、脱中心的、脱領土的なネットワークから成り立つ権力構造であるということになる。このような〈帝国〉に対して、ネグリとハートは、更に〈帝国〉に抗する新たなる主体としてマルチチュードを位置付けようとする。そこで捉えられるマルチチュードは、特異性と多様性からなる主体として従来の人民や国民という単一的な主体とは区別され、その異種混交による内在的な差異化＝微分化の過程が、新たな変革の可能性を生み出す多様なる運動性＝生成性に結び付かなければならないとされる。

本論は、ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリとの関連を踏まえながら、〈帝国〉という資本の自己運動、すなわち全ての生を包摂し、管理・規制する生権力を捉えると共に、マルチチュードの特異性、差異性の視点から多様なる生を開放する生政治を問い直すことを目的にする。そこで見出されるのは、ネグリとハートが、〈帝国〉をマクロ政治学の視点から捉えながら、一方マルチチュードをミクロ政治学から位置付けているという矛盾である。こうした二律背反的な矛盾を克服する上で、多様なる生成性の観点からなる政治学の必要性を捉えた。

キーワード

〈帝国〉、マルチチュード、〈共〉、生権力、生政治

1. はじめに

アントニオ・ネグリとマイケル・ハートは、近代の国民国家を超克して現れてくる資本のグローバル化によるネットワーク的あり様を〈帝国〉（Empire）として位置付ける。そこで位置付けられる〈帝国〉は、固定した境界や内部と外部という枠付けを突き崩す形で生成する内在的な運動であり、また脱中心的で脱領土的な支配装置であるといえよう。そして、ネグリとハートは、現在進みつつある資本主義のグローバル化、すなわち〈帝国〉への移行が新たな世界秩序を構成する主権的形態として現れるところに変革への可能性を見出そうとする。

本論は、〈帝国〉というグローバルなネットワーク権力を中心に、〈帝国〉に対抗する新たなる変革的主体として定義されるマルチチュードを対象に考察を行う。その際、ネグリと親交のあったジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリが展開する生成性（devenir）や多様性（multiplicité）、あるいは資本主義分析を通じて〈帝国〉とマルチチュードの捉え直しを行っていく。また、ネグリが〈帝国〉を分析するにあたって、その前提とする構成的権力がどのような動的な創造的／刷新的な行為として位置付けられ、資本のグローバル化に伴う主権的形態へと展開を図っていったのかを見ていく。そこで問題になってくるのは、〈帝国〉におけるアメリカの位置付けであるといえるだろう。ネグリが〈帝国〉の原型として見出す理念としてのアメリカ像とグローバル化における実態としてのアメリカとの落差、そこに、構成的権力、ひいては〈帝国〉を展開する上における乖離を如実に現していると見ることができる。そして、最終的に全ての生を包摂し、管理・規制する生権力（biopower）と多様なる生を開放する生政治（biopolitics）との関連を通じて、マクロ政治学の視点から捉えられる〈帝国〉と、ミクロ政治学の視点から個々の特異性（singularité）として見出されるマルチチュードとの間の矛盾を再考することにする。

2. 〈帝国〉とグローバル資本の普遍化

では、〈帝国〉とはいかなる支配形態と見なされているのであろうか。ネグリとハートは、先ず近代における国民国家と資本との関係から説き起こし、国民国家の枠組みを超えた資本のグローバル化に伴い現れてくる脱中心的、脱領土的なネットワークのあり方に、新たなる主権的権力としての〈帝国〉への移行を捉えようとする。しかし、そこで捉えられる〈帝国〉は、資本の自己運動による膨張の過程が、帝国主義とでは異なって現れているという事態である。先ずネグリとハートが帝国主義をいかに捉えているかだが、「諸々の支配的国民国家による世界の分割、植民地経営の確立、貿易の独占的権益や関税の押しつけ、独占体やカルテルの形成、原材料産出地域と産業生産地域の区分など」[1]を通じて資本の利益を促進するシステムによる支配形態と見なしている。それと共に、多様なグロー

バル空間に厳格な境界、すなわち世界市場の実現へと国民国家を超えて無限に膨張しようとする資本の流れをせき止める内部と外部を創り出し、均衡を保つことも行うとしている[2]。その点では、これまで論じられてきた従来の帝国主義論、その歴史認識とは違いはないといえよう。それが異なってくるのは、端的にいえば、帝国主義の段階では外部への膨張が暴力的に可能であったのに対して、〈帝国〉ではもはやそうした外部を喪失した上での内在的な運動であるとしている点でである。すなわち、帝国主義は、国民国家が内部と外部との境界を設けつつ、外部への膨張がいまだ成り立ち得る余地が残されている多中心的な構造があるとするなら、現在進みつつある資本主義のグローバル化とは、そうした膨張の可能性がある意味完結し、国民国家を超えて世界市場がひとつの形態となって立ち現れてきた資本の普遍化であるということになる。

「〈帝国〉への移行は近代的主権が終わりにさしかかったころ、その黄昏のなかから姿を現わす。帝国主義とは対照的に、〈帝国〉は権力の領土上の中心を打ち立てることもなければ、固定した境界や障壁にも依拠しない。〈帝国〉とは、脱中心的で脱領土的な支配装置なのであり、これは、そのたえず拡大しつづける開かれた境界の内部に、グローバルな領域全体を漸進的に組み込んでいくのである。〈帝国〉は、その指令のネットワークを調整しながら、異種混交的なアイデンティティと柔軟な階層秩序、そしてまた複数の交換を管理運営するのだ。要するに、帝国主義的な世界地図の国別にきっちりと塗りわけられた色が、グローバルな〈帝国〉の虹色のなかに溶け込んでいったわけである。」[3]

このような〈帝国〉への移行については、第二次世界大戦以降、米ソによる冷戦構造による対立軸が、資本主義の膨張のための膨張を抑止する作用を働かしてきた。それが、ソビエト・東欧諸国の社会主義体制の崩壊により、資本の自己運動が、制限を受けることなく加速度的にグローバル化するようになってきたのが、近年の動向である。帝国主義の段階では、資本主義による膨張運動は、欧米列強諸国による覇権的競合を伴わざるを得ず、国民国家を衰退させる矛盾を内在させながらも、その暴力的手段の競合が国民国家の限界を遅延させる結果となっていたことは否めない。だが、今日の情報技術の発展は、易々と国家の境界を飛び越え、金融市場をリアル・タイムにつなげグローバル化していくようになってきた。このような資本主義的状況において、〈帝国〉は、「国民国家の主権の衰退と国民国家が経済的・文化的な交換をますます規制できなくなっているということが、〈帝国〉の到来を告げる主要な徴候のひとつ」[4]として見なされることになる。そのような移行において〈帝国〉は、もはや国民国家の政治性に依拠することなく、全てをその脱領土的な自己運動に包摂し、内部化することによって成り立つといえる。そして、そこに見出されるのは、世界を単一的な構造性によって均質化＝同質化する政治経済システムということになる。正に、資本主義的膨張の行き着く先に、膨張すべき外部性を喪失した形で到来するのが〈帝国〉という脱中心的な資本形態であり、そこにおいては、従来の国民国家は衰退を余儀なくされる一方、超国家的な組織

や基軸となる先進資本主義諸国が金融と情報の結節点（ノード）となって脱中心的なネットワークを形成するようになっていくことになる。

以上のように資本のグローバル化／普遍化による主権的権力のあり様をネグリとハートは〈帝国〉と見なしたが、では、そこで捉えられる脱中心的、脱領土的なネットワーク的権力のあり様とは、一体具体的にどのような権力構造から成り立つのであろうか。ネグリは、従来の国民国家とは異なる構造として〈帝国〉を位置付けるが、その具体的な像となると不分明といわざるを得ない。帝国主義、あるいは帝国は、西洋先進資本主義諸国による海外侵略、それに伴う植民地化と資本の膨張という具体的な歴史的事態を背景にして見出され、分析されてきた。それに対して、では、外部性の喪失による内在的な資本の自己運動によってもたらされる国民国家の衰退、その結果として立ち現れてくる〈帝国〉は、ネグリとハートが様々な理論を応用して理念的に示しているとはいえ、具体的なグローバル化の現状にどこまで適応できるのかが証明されていない面がある。そのことが、以下のような批判が一般的に見られることになる。

「ほとんどの問題が、ハートとネグリがメタファーと理論に多大な信頼を寄せ、その反対に議論の経験的妥当性の吟味を体系的に怠っていることに関係している。この本『〈帝国〉』全体を通して展開された著者たちの学識に多くの読者が一方では感銘を受けるであろうが、経験的な証拠が示されないような事実の記述、それどころかさらに悪いことには入手できる資料に基づいて容易に反証できるような事実の記述によって、懐疑的な読者には納得がいかないことになる。」(5)

確かに、現状のグローバリゼーションの動向を見ると、先進資本主義諸国による新自由主義体制の影響を抜きに語ることができない。それが、南北間の経済格差を更に拡大させ、そうした矛盾が民族や宗教と結びついた原理主義運動や偏狭なナショナリズムを生み出してもいる。その意味では、金融や情報を通じて、むしろ一部の先進資本主義国や国際的組織等に権力が集中しているのが現状であるといえるだろう。そのようなグローバル化による資本の集中とその階層構造化において、果たして非―場として現れる分散的なネットワーク状の〈帝国〉への移行という視点は、どこまで有効であるかが問われてくるのは当然の成り行きであるといえよう。

3．〈帝国〉とドゥルーズとガタリの資本主義分析

3―1．〈帝国〉と統合的世界資本主義

こうしたネグリとハートの〈帝国〉において押さえなければならないのは、ドゥルーズとガタリとの関連であろう。脱中心的、脱領土的ネットワークという言葉使いに、ドゥルーズとガタリが展開したリゾームやノマディズム等とのつながりを想起させる面があり、そこに影響関係を読み取ることができるだろう。

そのような〈帝国〉という現状と類似した先駆的な視点として、一九七〇年代後半における資本主義の統合化の過程を分析し、そこ

に統合的世界資本主義（Capitalisme Mondial Intégré）という新たな像を見出したのがガタリである。その意味では、現状のグローバリゼーションを取り巻く現状とは時代背景が異なるとはいえ、〈帝国〉の先駆的モデルとして、ガタリの統合的世界資本主義を押さえておく必要がある。

先ず、ガタリは、資本主義を生産、流通、分配のひとつの特殊な様式が記号化すると共に、その運営を超コード化しコントロールするシステムから成り立っていると見なしている。そして、欲望の価値体系が使用価値の交換価値への依存に再構成され、生産労働が機械主義に従属する方向に向かっていると捉える。こうした機械主義と資本主義の記号化の様式を通じて、機械的時間が人間的時間に代わり、「オートメーション化しコンピュータ化された生産はもはや人間としての基礎的ファクターをもとにして一貫性をひきだすのではなく、人間のあらゆる機能、活動を貫通し、枠づけ、分散させ、極小化し、とりこむ動物のような機械状組織から一貫性をひきだす」(6)変化が起っているとされる。このような資本主義の変化において、ガタリは、伝統的な分節的資本主義群に対して、新たに統合的世界資本主義を位置付けようとする。分節的資本主義群とは、国民国家の中に領土化され、ひとつの貨幣的・金融的な記号化の下に統一化されている従来の資本主義である。他方、統合的世界資本主義は、金融資本の記号化だけでなく、科学技術的、巨視あるいは微視社会的、マス・メディア的等の隷属化の方式に依拠し、世界的規模に統合された資本主義のネットワーク・システムとして定義している。

「この新型の資本主義は独占資本主義と様々な形態の国家資本主義とのあいだに起きる相互的な変容と適応から生じる。それは搾取と社会的分離にもとづく階級・カースト社会のいろいろな構成要素を世界システムのなかに統合する。その中心的な決定機関は地上の全域に枝分かれして、列強間の国家利害に対して一定の自治を獲得し、もはや限定された政治的空間に完全にはおしこめることができない複雑なネットワークを形成していくようになる。このネットワークは社会統制、マス・メディアによる枠づけの体系的な政策を発展させる。」(7)

ガタリは、資本主義の膨張運動による変化を、全ての記号化を通じて統合するネットワーク的権力として捉えているといえる。それと共に、こうした統合的世界資本主義による図式とは異なる形でガタリが示そうとするのが、既成の権力＝統合的世界資本主義の「状況統制力の漸進的喪失」であり、「周縁部、少数派、自治（新旧の）増殖が、欲望の独自性（個人的そして／もしくは集団的な）の開花や、民族国家に属する権力構成体を接収した新型の社会的分割の出現」であるということになる(8)。そこで新たに見出されているのは、既成の権力に抵抗する新たな主体を形成する特異性であるといえ、「統合的世界資本主義の経済的言表行為の配備のもつ適応能力や転換能力の限界は、多分、「一次元的」な合目的性を拒絶する社会的諸階層の総体のもつ抵抗能力の刷新との関係においてあらわになる」(9)とされることとなる。すなわち、問題とされているのは、

すべてを均質的に統合しながらネットワーク状に拡張する単一的／モル的な資本主義機械とそのマクロ政治学的なあり方であり、それに対抗する形で新たに位置付けられる多様なる欲望を開放していく分子革命と欲望機械によって生じるミクロ政治学的な生成性であるということになる。

このようにガタリが捉えた統合的世界資本主義は、ネグリとハートが見出す今日の〈帝国〉のあり方、そしてそのような〈帝国〉に対抗するマルチチュードと相通じる部分があると見なさざるを得ない。ネグリは、こうしたガタリの統合的世界資本主義の概念を共有化していることは明らかであり、このことはガタリとネグリの両者による共著の中でその概念が触れられていることからもうかがうことができる。その共著の中で強調されているのは、生の特異性であり、多様なる欲望の開放による内在的な変革の可能性であるということになる。そして、そこで問題として取り上げられたのが、一九八〇年代半ばの「資本主義そして／あるいは社会主義体制」の再構造化であり、「社会化された生産は地球上のほぼ全域でその法則を生殖の領域にまで刻みつけており、人間的生の時間は社会化した生産プロセスの時間によって徹底的に収奪されている」(10)という統合的世界資本主義による搾取と全体化の過程であることになる。ガタリとネグリは、そこに全ての生を包摂し、統合する生権力の編成メカニズムの現れを見ると共に、逆説的な形で全体主義的対象化を進める資本主義を転倒させていく特異性、その生政治性を問うようになっていく(11)。

だが、ここで見落としてはならないのは、ネグリは、一九七〇年代のイタリア・アウトノミア運動の理論的指導者であり、資本による剰余労働の搾取に対する批判を元々行っていたことである。そこで目指されていたのは、自己価値創造を求めたラディカルな政治運動として、非階層的な生活者による社会組織化の民主的形態であった。その意味では、ガタリが、統合的世界資本主義への対抗として考えていた分子革命としての面をある意味具体的な運動の形で具現化し、概念化してきたのがネグリであるともいえ、ガタリとネグリの関係は、当時の資本主義に対する共通認識を基礎にした相互補完的なものであったと見なせるのではないだろうか。それが、現状の資本主義分析へと展開され、〈帝国〉に結びつくことになったと考えられる。

3―2．〈帝国〉と資本主義機械

そのような資本主義分析との関連で、ガタリはドゥルーズと共に資本主義の自己運動を欲望する諸機械の視点から、生産する欲望として脱コード化と脱領土化の運動の面において捉えようとした。情報化の過程と相まって進展する消費社会の高度化は、強迫的な形で日常的な消費行為を反復させることで、人々をその資本主義的システムに内部化させていく。ドゥルーズとガタリは、このようなあり方を欲望と資本主義との問題として、脱コード化と公理系という概念を用いて説明しようとする。すなわち、欲望の流れを抑圧し、社会体を構成するものとして、先ずコード化による原始土地機械が、

次いで超コード化による専制君主機械が、そして、脱コード化による資本主義機械が連接の上に設立されるものとしてあげられており、それぞれの社会のあり方、社会機械や技術機械によって生産のあり様が異なってくるとされている(12)。資本主義では、脱コード化が行われることによって様々な欲望の流れが本来のあり方から引き離されることになるが、そうした流れが無秩序にならないように、資本という充実身体の上に再領土化されることとなる。ドゥルーズとガタリは、この資本主義における調整のあり方を公理系と呼び、次のように述べている。

「資本主義は、その資本主義的生産と、その資本主義的循環というその特殊な諸条件の中に《つまり、資本そのものの中に》内なる極限をもっているが、しかしこの資本主義は、たえず大きくなる規模において、これらの極限〔境界線〕を再生産し拡大することによってしか作動しないのだ。だから、資本主義の公理系が決して飽和することなく、以前から存在する種々の公理に常に新しい公理を付け加えることができるのは、まさしくこうした資本主義の力なのである。資本主義は内在野を限定し、この内在野の内容を充実することをやめない。」(13)。

このように資本主義機械は、様々な欲望の流れを脱コード化し、更に土地や領土に帰属するあらゆるものを脱領土化し、流動化させる内在的なシステムとして現れる。だが、そうした欲望をそのまま無秩序に放置する訳ではなく、一定の意味＝方向の下に、反復的な消費行為を通じて欲望の達成や解放を遅延させ、新たな欲望へと回収し続けていく循環的な回路に人々の諸欲望を取り込んでいくことで、資本という充実身体に再領土化を図っていくことになる。そこに働くのが資本主義の公理系であり、様々な欲望の流れを調整することで、資本主義的内在野に再コード化していくことになる。そして、その流れの調整役として現れ出てくるのが、資本主義国家であるということになる。

「要するに、種々の脱コード化した流れの連接や、これらの流れの間の微分の比や、さらにこれらの流れの多様な分裂や裂け目、こういったものすべては全面的に調整を要求するものであり、この調整の主要器官が《国家》なのである。資本主義《国家》は、資本の公理系の中で捉えられる限り、こうしたものとして、脱コード化した種々の流れの調整者である。」(14)。

切断と接続を通じて資本主義機械は、種々の欲望の流れを脱コード化すると共に、再領土化し、再コード化する循環的な過程を調整していく上で、その公理系における調整役としての超越的統一体が社会的諸力の場に内在していくことが必要となってくる。それが、資本主義国家であり、ひいては超克し、否定したはずの原国家が回帰してくることになる。そこで捉えられる原国家は、超コード化によって規定された根源的な専制君主機械として立ち現れてくることになる。その意味では、資本主義機械とは、あらゆる欲望の流れを脱コード化する強度を内在させているだけでなく、それを再領土化することで調整する根源的な暴力性に裏打ちされて初めて見出されることになる。

では、グローバル資本による脱中心的、脱領土的なネットワークとして見出される〈帝国〉において、資本主義機械における公理系、あるいはそれを調整する超越的統一体というものは、どのようなものが該当するのであろうか。

〈帝国〉では、資本主義的膨張という自己運動が世界全体を覆い、全てが内部化された形で、従来の国民国家は超克された事態と見なされている。それ故に、〈帝国〉というグローバル化にとって、国民国家／資本主義国家それ自体よりは、むしろ脱中心的なネットワークにおける情報と金融の結節点として見出される国際組織や超国民国家が重要となってくる。だが、それらも結局は、〈帝国〉を構成する一要素に過ぎないといえ、また、その調整そのものは偏った調整に陥らざるを得ないことはいうまでもないだろう。その意味では、〈帝国〉は、調整役となるべき中核的な主体を欠いた資本のオートポイエティクな自己運動そのものであると見なさなければならない。ネグリとハートは、そうした〈帝国〉という資本のグローバル化の行き着く先、すなわち暴力性を伴った資本の膨張運動そのものが外部性を喪失し、内部へと空転せざるを得なくなるところにその限界と矛盾を捉え、新たな可能性としてマルチチュードを位置付けようとする。

4．〈帝国〉における構成的権力／構成された権力

4―1．構成的権力と構成された権力

こうした〈帝国〉は、ネグリが展開した構成的権力（構成する権力）を具体的な形で分析した結果見出したといえ、それ故〈帝国〉を考察する上で前提となる構成的権力を押さえておく必要がある。そこでネグリが捉える構成的権力とは、立憲主義的パラダイムにおいてこれまで憲法制定権力として認められてきた権力のあり方を民主主義との関連で読み替え、社会の政体を動態的な形で決定する権力の構成ということになる。

「……構成的権力のパラダイムは不意に現われる力のパラダイムであり、いっさいの既存の均衡、いっさいの持続の可能性を断ち切り、中断し、切り裂く力である。構成的権力は民主主義が絶対的権力であるという思想に結びついている。したがって、出現と拡張の力としての構成的権力の概念は、民主主義的全体性がすでにつねに社会のなかで構成されているという事実に結びついている。」(15)

本来、憲法制定権力は、法体系において、社会の変革時その当事者達が新たな形で憲法を制定し施行することで行使される権力とされている。それ故、憲法制定権力は、構成的権力として立憲的な法体系を構築することになる。ところが、一度制定され施行された憲法は、国内法における上位法として位置付けられ、全ての法を吊り支え、位階化する中心点＝ゼロ記号として現れることになる。すなわち、構成された憲法は、自らの基盤である社会が変革されることがない限り、上位法として自ら拠って立つ立法的な構造性を維持し統合する権力として存続し続けることになる。このように本来憲法を制定するという創造的な行為であった憲法制定権力＝構成的権力

は、憲法を中心に据えた法体系／構成された権力へと変質していくことになり、社会を単一的な構造性に組み込んでいくことになる。ネグリは、こうした社会体を維持する構成された権力へと変質していくことに対して、新たな形で構成的権力の読み替えを図ろうとする。そして、そこで捉えられる権力は、いわゆる他者や異質なものを抑圧・排除することによって成り立つ単一的な構造＝権力ではなく、多様性へと開かれた動的な構造化を促す力であるということになる。それ故に、何者にも拘束されない創造的な行為を構成的権力の本来の力として見出すために、ネグリは、人々の日常的な生を規制し、拘束する規範的な権力構造を生権力の問題として捉え、多様な欲望に基づく持続的な刷新的行為を、また人間的能力の拡張による民主主義の可能性を位置付けようとする。

「構成的権力は多数性の情念、多数性の社会的表現を刺激しながら力を組織する情念であり、歴史の流れが権力を頽廃のなかに消し去ろうとする場そのもの、あるいは権力を循環の無気力のなかに眠り込ませる場そのものにおいて作動するのである。構成的権力は現実的なものに回帰する能力、ダイナミックな構造を組織し、形成力をもつ形態を構築する能力を体現するものであり、その能力は、妥協や力の釣り合いや様々な秩序や均衡を通して、そこにつねに原理の合理性、すなわち社会的なものとその際限のない運動に対する政治的なものの物質的な適合を見出そうとするのである。」(16)

こうした構成的権力の持つ多様性は、ドゥルーズとガタリとの関連をうかがうことができるが、構成的権力における刷新性／創造性に内在する根源的な暴力性について、ヴァルター・ベンヤミンの神話的暴力と神的暴力と相通じる面を見ることができる。そこで見出される神話的暴力は、境界を設定し法を措定し、維持する暴力であるとするなら、神的暴力は、法を破壊する暴力であるということになる。更に「神話的暴力はたんなる生命にたいする、暴力それ自体のための、血の匂いのする暴力であり、神的暴力はすべての生命にたいする、生活者のための、純粋な暴力である。」(17)とされている。そこで位置付けられる血の匂いのしない神的暴力は、ネグリとハートが捉える生の多様性による生政治との関連において捉え返すことができる。すなわち、ネグリとハートがポストモダン社会を構成する新たなる主体としてのマルチチュード、そしてその多様性によって創出される共同性／協働性、あるいは〈共〉の具現化された形での民主主義において、法や制度を構成していく上で否が応でも向き合わなければならない純粋な暴力性をどう内在化していくかが問題となってくる。そして、その面で問題になるのは、否定のための暴力ではなく、ベンヤミンが見出す意味での全ての多様な生を肯定する純粋な暴力性であるといえるだろう(18)。

そこで見逃してはならないのは、〈帝国〉が構成された権力で、その内在的な対抗的主体としてのマルチチュードが構成的権力という単純な図式には収まらない面があるということである。すなわち、旧態的な主権的権力とは異なり、脱中心的なネットワークから構成される〈帝国〉は、外部なき脱領土的な非－場として成り立つ資本

の内在的な自己運動である限り、内部に自ら異質性を巧妙に創り出し、排除していくことで自己の限界を遅延させていく必要があり、そうした内在的な循環的回路に構成的権力に伴う原-暴力的側面を介在させざるを得ない面を持ち合わせているからである。ネグリとハートは、こうした〈帝国〉内の原-暴力的な回路によって構成される経済的ヒエラルキーについて、貧富の恒久化と搾取に伴う階層的包含からなる生産システムとして捉え、「グローバルなアパルトヘイト体制」(19)の中で人々が生きるようになっていると見なしている。

4―2. アメリカの位置―理念と現実―

だが、このことは〈帝国〉による脱中心的なネットワークが単純な水平的な構造から成り立っていないことを意味する。ネットワーク内の結節点は、情報や金融が集中し、そこに階層構造を創り出していく。例えば、サスキア・サッセンが捉えるグローバル都市は、情報やサービスのインフラが集積するだけでなく、様々な人々が移民として流入するポスト・コロニアルな拠点と見なされている。それ故に、異文化やエスニシティが混交した形で内的な差異化=差別化を生み出していくことになる(20)。そこにおいては、家事・育児等の家庭内単純労働を女性移民労働者に担わせながら、妻/母親である白人女性は、知的労働に従事することができるような形で、移民の流入により、これまで単純な性差別の問題が民族や人種等と複雑に絡みながら、新たに内的な階層的な構造を生じさせる可能性をはらんでいることを見逃してはならないだろう。ネグリとハートは、国民国家を超克する〈帝国〉という図式を単純化する余り、こうした結節点が脱中心的なネットワーク内の特異点としてどのように内的な階層性を生じさ、どう非-場としての〈帝国〉を構成することになるのかが十分に明らかにされていない。

そして、そこで問題になるのが、アメリカによる一極化、その単独主義的な傾向である。〈帝国〉という脱中心的なネットワークの結節点=特異点として特権的な位置を占めているアメリカに対して、ネグリとハートは、〈帝国〉の観念がアメリカの立憲的〔政体構成的〕プロジェクトのグローバルな拡大を通じて生じると見なし、〈帝国〉の原型としてアメリカを位置付けるところに、アンビバレントな視点に見ることができるだろう。それは、例えば、湾岸戦争以降のアメリカの軍事行動が、〈帝国〉内での内戦に対する秩序を保全する警察的行為なのか、それとも対外的な侵略としての帝国主義的戦争なのかという形で露わになる面でである。こうしたアメリカに対する位置付けの曖昧さは、〈帝国〉が帝国主義的要素をいまだはらんだ過渡期にあることを示しているともいえ、そのような〈帝国〉のモデルとして、ネグリとハートは、アメリカを次のように位置付けている。

「いま一度私たちは、この〔合衆国〕憲法が〈帝国〉的なものであって、帝国主義的なものではないということを強調しておくべきだろう。それが〈帝国〉的なのは、合衆国の立憲的〔政体構成的〕プロジェクトが〔自己の権力をつねに閉じた空間の内部で単

線的に拡大し、支配下にある国々を侵略し破壊し、それらをその主権の内部に包摂するような、帝国主義的プロジェクトとは対照的に〉、開かれた空間を再接合し、限界のない領野を構成するネットワークのなかで多様にして特異な諸関係を絶えまなく再発明してゆくようなプロセスをモデルにして構築されているからなのである。」(21)

そして、〈帝国〉という脱中心的ネットワークにおける中核的な結節点＝特異点として、階層序列の問題においいてアメリカは捉えられることになる。

「なるほどたしかに、合衆国は、〈帝国〉のなかで特権的な位置を占めてはいる。だが、その特権は、かってのヨーロッパにおける帝国主義的列強との類似性に由来するものではなくて、そうした列強との諸々の差異に由来するものなのだ。それらの差異は、合衆国の政体構成のまさしく〈帝国〉的（帝国主義的ではなくて）な定礎に焦点を合わせると、きわめてはっきりと見えてくるだろう。「政体構成」という言葉によって私たちは、さまざまな修正条項と法的装置をともなう書かれた文章である形式的な政体構成〔憲法〕を示すと同時に、社会的諸力の編成のたえまない形成と再－形成を意味する実質的な政体構成を示している。」(22)

だが、それ以降のアメリカの動向を見ると、〈帝国〉から旧態的な帝国主義への揺り戻しが強まっているといえる。つまり、帝国主義的な側面と〈帝国〉的な側面とに引き裂かれたアメリカが顕在化してきているのである。こうしたアメリカの単独主義的動向に対して、ネグリとハートは批判を行うようになっていくが、以上のようにアメリカに対するネグリとハートの評価に矛盾が見られるのも、構成的権力の視点からアメリカの国家としての成り立ち、そのフロンティアという自由な空間の拡張と独立革命を肯定的に捉えているところに起因すると見ることができる。

「アメリカの構成的権力は、マキアヴェリが時間の切断するものとして把握した権力の絶対的なラディカルさを、無限の空間の中に投じる。一人ひとりを解放し、彼らを市民にするのがまさに政治社会である。こうした市民が無限の空間を領有する。……すなわち、人びとがイギリス国王から自由になり、アメリカの空間が構成されてしまった後には、自由化はもはや分離の契機たる根拠をもたない――自由化は政治的解放、市民の主体化、国の全土で幸福を追求する自由のなかに組み込まれる。革命の民主的な体験は『独立宣言』と共に構成的権力の拡張的な性質を発見する。フロンティアをめざす歩み、そしてフロンティアをたえず乗り越えようとする歩みのなかで、民主主義のプログラムはますます堅固になってゆく。」(23)

そこで見出されるアメリカの構成的権力は、空間的な拡がりをフロンティアの対象として構成されるべきものとされ、それが市民に自由を与え続けるものとされる。それ故に、アメリカの構成的権力は、構成された権力＝立憲的権力への変容、すなわち質的な多数から量的な絶対多数への変質に対して、平等と自由を目指していくものと見なされている。そして、そこで求められるのは、個々の特異

性の集合、新しい空間を構築する多数者からなる変革的な構成的権力であるということになる。

このように「構成的原理は、憲法と政治的諸機構を貫き、それらを破壊しながら、こうしてたえず再生し、自由のスキャンダルとして、また同時に自由の危機の唯一の解決として現われる」(24)ものとして、ネグリはある意味構成的権力の永続的な変革の可能性をアメリカのフロンティア、その自由の空間化と拡張性の中に見出しているといえよう。そうしたネグリが構成的権力として理念的に捉えるアメリカと、アメリカの主導の下に一極集中化していくグローバリゼーションという現状との間に大きな落差を認めざるを得ない。むしろ、ネグリ的に見れば、自由のフロンティアとしてのアメリカの構成的権力が本来の革命性を失い、自由の意味が「統治に積極的に参加する自由というポジティブなものから、法の庇護のもとで行動する自由、あるいは固有の財を享受する自由というネガティブなものへ」(25)と移ることにより、立法的ヒエラルキー的構造へと変質した結果であるということになる。だが、そこで見なければならないのは、そのようなアメリカの構成的権力そのものが、〈帝国〉の原型として位置付けられることである。すなわち、最終的にネグリが特異性における個々の人間の自由と多様性を重視するが故に、アメリカの構成的権力の可能性を認めながらも、国民国家としての限界性をそこに見出さざるを得なかったためであるといえるだろう。だが、このことは、アメリカに対するネグリの視点が、構成的権力としてのアメリカ、〈帝国〉と帝国主義という両面を持つアメリカという理念と現実の間にズレを生じさせる結果をもたらしていることである。そのため、脱領土的な非-場の特異点としてアメリカの動向そのものが〈帝国〉への移行を左右しかねない要素となっているのである。

5．〈帝国〉に抗するマルチチュード

このような〈帝国〉への移行において、マルチチュードは、国民国家の枠組みの中で構成されてきた人民（people）とは異なる新たなる民主的な主体として位置付けされることになる。従来の人民という概念では、その意味合いが国家との関連から単一的な形で規定され、同一的な人格主体として見なされてきた。これに対して、マルチチュードは、多様性に基づく能動的な主体であり、〈帝国〉に対抗していく異種混交的な集合／多様なる者として捉え直さることとなる。正に〈帝国〉内部におけるオルタナティブな主体として、資本主義システムの内在的矛盾の裏返しとして現れ出てくるものということになる。

こうした人民とマルチチュードの二つの極について、パオロ・ヴィルノは、一方をトマス・ホッブズに、もう一方をバルーフ・スピノザに由来するものとして、以下のようにマルチチュードについて述べている。

「スピノザにとって、〈multitudo〉とは、政治的舞台において、集団的行動において、共有の問題を引き受ける際に、いかなる

《一者》にも収斂することなく、いかなる求心的な運動の中でも発散することのないような、それとして存続する複数性を意味しています。すなわち、マルチチュードとは、〈多数的なもの〉〔molti〕の多数的なものとしての社会的、政治的存在形式のことなのです。それは、偶発的あるいは中間的な形式ではなく、恒常的な形式です。スピノザにとって、〈multitudo〉は、諸々の市民的自由のアーキトレーブ〔梁部〕となっているのです。」(26)

すなわち、人民が国家との不測不利な相関関係において単一性に収斂していくものと位置付けられていたのにに対して、マルチチュードは、国家という政治体以前に存在した多様性として、如何なる統合的単一性に収斂せず、むしろ国家の求心性を脅かす危険な存在として見なそうとする。すなわち、人民は肯定的に国民国家の産物として歴史の表舞台に現れ出ていき、逆にマルチチュードは人民概念に対立するものとして否定されることになる。そうした人民とマルチチュードの相違について、ネグリとハートは、「マルチチュードがいつまでも閉ざされることのない構成的な関係性であるのに対して、人民は主権のために整えられたすでに構成済みの統合体」(27)として捉えている。

ところが、単一的な主権的権力に基づく〈帝国〉という状況において、国家主体に位置付けられてきた人民概念からはみ出し、負のイメージで捉えられてきたマルチチュードという概念が、その多様性と特異性の故に、オルタナティブなグローバル運動に通じて見直されてきている。すなわち、国家によって規定された一者的な人民ではなく、国家創設以前の未規定な強度の流れにおいて立ち現れてくる構成的権力、その根源的な暴力性の下に見出される多様性としてマルチチュードの変革性が求められているといえよう。

そこで捉えられる〈帝国〉とマルチチュードは、国民国家による内部と外部という境界の枠組みを乗り越え、相互的な関係性を持つものとされるが、その反面、〈帝国〉は、対抗－〈帝国〉としてのマルチチュードに超克されるものとして、「マルチチュードが有する脱領土化を推進する力は、〈帝国〉を下から支える積極的な力であると同時に、その破壊を呼び求め、必然的なものとする力でもある。」(28)と見なされている。その意味では、マルチチュードは、近代における資本対労働者という図式を乗り越えるポストモダンにおける新たなる労働主体＝多様性として構想されていると見ることができ、その多様なる生と欲望が〈帝国〉を構成すると共に、それに超克していく潜在的な可能性として見なされていることになる。そして、そこで見出されるマルチチュードは、グローバルな資本システムに対して再配置を絶え間なく課し続ける個々の特異性と出来事性を形成し、異種混交性を推進する過程を内在させた運動ということになる。

「マルチチュードが働くとき、マルチチュードは生活世界総体を自律的に生産し、そして再生産している。自律的に生産し再生産するということは、新しい存在論的現実を生産するということである。じっさい、働くことによって、マルチチュードは自己を特異性として生産しているのだ。その特異性とは、いわば、〈帝

国〉の非-場に新しい場所を確立するような特異性であって、協働によって生産され、言語共同体によって表現され、異種混交化の動きによって促進される現実にほかならない。世界市場においてはあらゆる人間が交換可能であるというイデオロギー的幻想を転倒させることで、マルチチュードはみずからの特異性を肯定する。市場イデオロギーを足で立たせながら、マルチチュードはみずからの労働をとおし、グローバルな交換のありとあらゆる結節点を横切って、人間存在のさまざまな集団と集合体の生政治的な特異化を促進するのだ。」(29)

そして、そのようなマルチチュードの構成的な活動は、〈帝国〉への対抗的抵抗としてだけでなく、異種混交的な新しい主体の可能性となる自由な空間／共同的なものを構成し、ポストモダン社会へと世界を創り変えていく生政治的な横断的活動として位置付けされてもいる。そこで重視されるのは、個別的な出来事性＝特異性に基づくミクロ政治学的な生成性＝運動性である。

「マルチチュードが人民のような同一性も、大衆のような均一性ももたない以上、マルチチュードの内的差異は、相互のコミュニケーションや〈共（the common）〉を見出さなければならない。もっとも実のところ、私たちが分かち合う〈共〉とは、見出されるものというよりは生み出されるものなのだが。……私たちの行うコミュニケーションや共同作業や協働は、〈共〉を基盤にしているだけでなく、それ自体も〈共〉を生み出す。したがって両者の関係性は螺旋状に拡大していくのである。」(30)

更に、そうしたマルチチュードの内的差異は、〈帝国〉におけるグローバルなネットワーク権力構造を転用することによって、国境を越えた様々な出会いや協調／協働を醸成し、〈共〉を生産するネットワーク的な主体として立ち現れていくことが必要とされることになる。そうした〈共〉の拡大こそにポストモダンでの絶対的民主主義を構成する可能性をネグリとハートは読み取ろうとし、マルチチュードのひとつの現れとして、一九九九年シアトルで起こったWTO会議抗議運動を「これらのおびただしい異議申し立てがたんなる寄せ集めの種々雑多な声のかもし出す不協和音ではなく、グローバル・システムに対する〈共〉の声の大合唱である」(31)として位置付ける。

6．生政治学の位置―マクロ政治学とミクロ政治学―

そこで問わなければならないのは、マルチチュードであることからマルチチュードに生成変化することへの転換ではないだろうか。〈帝国〉におけるネットワーク状権力に対して、絶えずその図式にズレや揺らぎを生み出していく横断的なネットワーク、あるいはその権力的な構造からはみ出し、抜け落ちていく逃走線＝漏出線が個別的な差異化＝微分化の過程において重要になってくる。そこにおいて見出されるのが、様々な他者との関わりから生起する個別的な出来事性であり、その内在的な運動によって生成していく特異性であるといえよう。その意味では、内在的な強度の流れは、起源や結

果といったものではなく、生成変化の過程そのものの変容性＝運動性であるということになる。そのような生成変化の過程において見出されるマルチチュードは、特異性の集合体としてだけでなく、あらゆる権力構造から常にこぼれ落ちていく余剰性として現れてくる潜在的な多様性として見なすことができるだろう。それが、個々の出来事を生成させながら、〈帝国〉を侵犯していく揺らぎやズレを生じさせていくことにならなければならない。

ネグリは、剰余労働を搾取し、生産関係に組み込む形式的包摂に対して、外部の喪失により内部のネットワーク的構造へと社会そのものが実質的に包摂されるところに〈帝国〉の生権力の現れを、すなわち個々の生そのものを管理・規制する権力をそこに見出した。また、それに伴い、大規模工場と大量生産によるフォーディズム／テーラー・システムから、情報や知識等による非物質的労働／情動労働を主体にしたポスト・フォーディズムへの生産形態の転換に対して、工場内労働者として階級化された「大衆化された労働者」から第三次産業の拡張による「社会化された労働者」へと労働者概念を拡張し、更に〈帝国〉的情勢を受けた形で、ポストモダン社会に向けてマルチチュードの生政治的な可能性を論じるようになっていった。そこには、虚構の外部性に立った超越的な主体による革命（Explosion）から多様な差異化＝微分化の運動に基づく内在的な変革（Implosion）へと、〈帝国〉に対抗するための新たな主体の変容が問われている。

だが、そこで問題になるのは、マルチチュードによる〈共〉の生産による生政治とは、どのレベルにおいて具現化させるべきものであるのかということである。上述してきたように、〈帝国〉というグローバル資本システムは、地球規模において全ての生を内包し、管理・規制化していくネットワーク状の自己運動としてマクロ政治学の視点から把握しなければならないものであるとするなら、他方マルチチュードは、個別的な出来事性から生成していく特異性と差異性＝微分化によって培われていくミクロ政治学のレベルで捉えられるべき運動であるといえるだろう。だからこそ、グローバルなネットワークからどのように逃走線＝漏出線を引き、〈帝国〉という構成された権力＝構造からはみ出し、ズレていくかが問われることになるのである。ところが、ネグリとハートは、マルチチュードというミクロ・レベルでの運動を多様性の視点から近代的な二項性、すなわち多様性対単一性という図式を否定しながら、いざ〈帝国〉というマクロ・レベルの視点に立つと、〈帝国〉の超克そのものを目的化する形で、マルチチュードを対抗―〈帝国〉としての主体に位置付けてしまうことになる。それ故に、マルチチュードを語る上で〈帝国〉的状況を事前に前提として位置付け、語らなければならなくなってしまう。そして、〈帝国〉を超克した末に現れるポストモダン社会をマルチチュードが主体になって構築されるべきものであると予定調和的に語ることで、〈帝国〉対マルチチュード、すなわち単一性対多様性という二項図式を、その意味ではネグリが批判していたヘーゲルの弁証法を採りいれる矛盾を犯している。そのため、本来マルチチュードが持つ特異性、多様性といったものがマクロ政

治学において矮小化させる結果に陥ってしまっている。

このようにマルチチュードが〈帝国〉に対抗するという図式に還元されてしまうのは、ネグリとハートがマルチチュード、あるいは〈共〉を複数形としてではなく単数形として――複数形のマルチチュードからなるひとつのマルチチュード（multitude of multitudes）として複数の要素からなる存在と見なしていたとしても[32]――用いるところにその一面を見ることができるだろう。マルチチュードは、いかなる者にも与することなく、構成的権力を体現する多様性、あるいは差異化＝微分化していく自己完結しない永続的な変革の運動性として、その生成変化を遅延させ保留していくことが必要なのである。ドゥルーズとガタリは多様性を内在的な生成において捉えていたといえ、マルチチュードも更なる生成性へと分裂していくことにこそ、そのミクロ政治学的な意味があるはずである。

ともかく、到来する社会、それがいかなる社会であるかが決定不能／決定不可能であるからこそ、マルチチュードは、その構成的権力／原-暴力的な現れを体現することができるといえ、ひとつの生権力的な図式に規定されずに、潜在的に多様に開かれ、差異化＝微分化していく生成性において捉えられるべきものである。その意味では、あらゆるところに遍在していくところにこそその主体的あり方があり、いかにマルチチュードとして生成変化していくかの強度が問われることになる。ただここで見逃してはならないのは、マクロ政治学があって初めて、その図式に対抗する形でミクロ政治学が語られるべきものではないということである。ガタリの分子革命が捉えるように、生政治的な意味合いを持つことができるのも、個々の出来事性を通じてあらゆる管理・規制する生権力的図式からこぼれ落ち、はみ出していく余剰としての生の多様性、特異性にこそマルチチュードの可能性を見出すべきであるからである。あるいは単独的かつ唯一無比な個別性がひとつの出来事性として生起していくところにこそ、個々の〈共〉が生産されることになるのである。それがマルチチュードを更なるマルチチュードへと生成し、微分化していくことに結びついていかなければならない。ネグリとハートは、グローバリゼーションにおける現状を資本の自己運動から〈帝国〉という生権力を読み解いたが、そうしたマクロ的状況を前提とする限り、マルチチュードのあるべき生政治的な余剰性を捉え損ねかねない面を持っているといわざるを得ない。個別性＝出来事性から生起する個々の〈共〉において、ネグリとハートが見出す民主主義／全員による全員の統治はミクロ政治学として可能性があるとしても、マクロ的状況においてどのような形で可能となり得るのかが不分明である。ドゥルーズとガタリは、特異性と差異性によるミクロ・レベルな生政治によって織り成され、リゾーム状に結び付いていく多数性のマルチ政治学――そこでは、マクロ政治学は宙吊りにされ、脱構築されることになる――を捉えたともいえるが、その意味では、ネグリとハートが見出す絶対的民主主義は、マルチチュードの別の可能性から問う必要があるだろう。

注

（1）Negri, Antonio/Hardt, Michael, 2000, *Empire,* Harvard University Press, p.322（アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『〈帝国〉』水嶋一憲他訳、以文社、2003年、p.420〜421）

（2）ハンナ・アーレントは、資本主義の膨張運動そのものが、膨張のための膨張の過程として成立していくと共に、その恒久的過程が自己目的化した暴力的な結果をもたらさざるを得なくなるところに、帝国主義の本質と矛盾を見出していく。そこで捉えられる権力は、資本の蓄積に向けて止むことなく回り続けるモーターとして、「無限の拡大のみが無限の資本蓄積を生み権力の無目的の蓄積を実現するという膨張の概念」であり、このよう剰余資本が原動力となって帝国主義的膨張がもたらす権力の過程は、人々の日常性を構成する全ての政治組織を障害と見なし、国民国家の体制すら破壊しかねない暴力性を伴って立ち現れてくることになる。そこにアーレントは、全体主義への萌芽を捉えている。／ハナ・アーレント『全体主義の起源2　帝国主義』大島通義、大島かおり訳、みすず書房、1981年、p.26〜27

（3）Negri/Hardt, *ibid,* p.xii〜xiii（ネグリ／ハート、前掲書、p.5）

（4）Negri/Hardt, *ibid,* p.xii（ネグリ／ハート、前掲書、p.4）

（5）ジョヴァンニ・アリギ「帝国の発展過程—世界システムの転換」『新世界秩序批判』島村賢一訳、以文社、2005年、p.10

（6）フェリックス・ガタリ『分子革命』杉村昌昭訳、法政大学出版局、1988年、p.57

（7）ガタリ、前掲書、p.75

（8）ガタリ、前掲書、p.75

（9）フェリックス・ガタリ『闘走機械』杉村昌昭監訳、松籟社、1996年、p.169

（10）フェリックス・ガタリ／アントニオ・ネグリ『自由の新たな空間』丹生谷貴志訳、朝日出版社、1986年、p.30〜31

（11）ガタリ／ネグリ、前掲書、p.62〜64

（12）Deleuze, Gilles/Guattari, Félix, 1972, *L'anti-Œdipe,* Editions de Minuit, p.311（ジル・ドゥルーズ／フェリックス・ガタリ『アンチ・オイディプス』市倉宏祐訳、河出書房新社、1986年、p.313）

（13）Deleuze/Guattari, *ibid,* p.297〜298（ドゥルーズ／ガタリ、前掲書、p.300）

（14）Deleuze/Guattari, *ibid,* p.299（ドゥルーズ／ガタリ、前掲書、p.302）

（15）Negri, Antonio, 1997, *Le pouvoir constituant,* PUF, p.15〔仏訳版〕（アントニオ・ネグリ『構成的権力』杉村昌昭、斉藤悦則訳、松籟社、1999年、p.33）

（16）Negri, *ibid,* p.401（ネグリ、前掲書、p.413〜414）

（17）ヴァルター・ベンヤミン『暴力批判論』野村修訳、岩波書店、1994年、p.59〜60

（18）ジャック・デリダは、ベンヤミンの神話的暴力／神的暴力を法の制定における根源的な暴力性から捉え直しを行っている。すなわち、法を維持する暴力が法を創始する暴力を隠蔽することによってしか自らの正当化を果たせない無根拠性に、法の脱構築による他者との応答可能性を見出している。／Derrida, Jacques, 1994, *Force de Loi,* Éditions Galilee（ジャック・デリダ『法の力』堅田研一訳、法政大学出版局、2000年）

（19）Negri, Antonio/Hardt, Michael, 2004, *Multitude,* Penguin Press, p.166〜167（アントニオ・ネグリ／マイケル・ハート『マルチチュード（上）』幾島幸子訳、日本放送出版協会、2005年、p.272）

（20）サスキア・サッセン『グローバル空間の政治経済学』田淵太一他訳、岩波書店、2004年、p.52

（21）Negri/Hardt, *Empire,* p.182（ネグリ／ハート『〈帝国〉』、p.235）

（22）Negri/Hardt, *ibid*, p.xiv（ネグリ／ハート、前掲書、p.6〜7）
（23）Negri, *Le pouvoir constituant*, p.206（ネグリ『構成的権力』、p.222〜223）
（24）Negri, *ibid*, p.256（ネグリ、前掲書、p.270）
（25）Negri, *ibid*, p.214（ネグリ、前掲書、p.230）
（26）パオロ・ヴィルノ『マルチチュードの文法』廣瀬純訳、月曜社、2004年、p.23〜24／なお、ヴィルノは、マルチチュードを共生的な相互行為として言語活動の側面からも捉えており、その面でネグリとハートとは異なる独自性を押さえておく必要がある。
（27）Negri/Hardt, *Empire*, p.103（ネグリ／ハート、『〈帝国〉』、p.142）
（28）Negri/Hardt, *ibid*, p.61（ネグリ／ハート、前掲書、p.90）
（29）Negri/Hardt, *ibid*, p.395（ネグリ／ハート、前掲書、p.490）
（30）Negri/Hardt, *Multitude*, p.xv（ネグリ／ハート『マルチチュード（上）』、p.21〜22）
（31）Negri/Hardt, *ibid*, p.288（ネグリ／ハート『マルチチュード（下）』、p.163）
（32）Negri/Hardt *ibid*, p.190（ネグリ／ハート、前掲書、p.14）

The Politics of Empire and Multitude

MAEDA Masaji

As a global capital system, globalization is sweeping modern society because transnational corporations have expanded beyond the borders of nationstates. In the process of globalization, there is a tendency to understand the overconcentration of the world as Americanization. And many people consider America to be an empire.

However, Antonio Negri and Michael Hardt propose a different view. They define Empire as the new global form of sovereignty which is evolving from global capital. This sovereignty is composed of a series of national and supranational organisms united under a single logic. As a result of the progress of Empire, the sovereignty of nationstates has declined. Negri and Hardt show that Empire is a decentered and deterritorializing apparatus of rule.

Against this Empire, Negri and Hardt define the multitude as a counter-Empire. In their view, the multitude is a multiplicity and a plane of singularities, an open set of relations. Therefore the multitude that has the deterritorializing power, sustains Empire and has the force which makes necessary Empire's destruction at the same time. As a consequence, the multitude will be able to form the hybrid sovereignty that creates post-modern society.

This paper aims to reconsider Empire and the multitude as defined by Negri and Hardt. Due to global capital movements, Empire expanded beyond the nationstates. Having thus used up opportunities to expand in the outside world, Empire had to switch to internal expansion. Empire is the autonomous movement of global capital, and a biopower which subsumes or controls each life. Against such biopower, the multitude is a biopolitics, which aims to liberate multifarious life from the perspective of singularities and differences. Therefore this report explores the relationship between macro-politics and micro-politics, namely the contradictions between Empire and multitude. In conclusion, this study considers politics from the point of view of multifarious becoming.

Key Words : Empire、Multitude、Common、Biopower、Biopolitics